

故毛利久博士 年譜及び業績目録

年 譜

- 大正 五年一〇月 四日、愛媛県宇和島市笹町二丁目五二番地第一にて出生。
- 昭和 九年 三月 愛媛県立宇和島中学校を卒業。
- 昭和一三年 三月 山口高等学校文科乙類を卒業。
- 昭和一三年 四月 京都帝国大学文学部史学科に入学。
- 昭和一六年 三月 京都帝国大学文学部史学科国史専攻を卒業。
- 昭和一六年 四月 京都帝国大学大学院に入学（二年九月退学）。
- 昭和二二年一〇月 恩賜京都博物館鑑査員補となる（二四年同鑑査員になる）。
- 昭和二七年 四月 京都国立博物館学芸課勤務となる（同年資料室長、三七年美術室長となる）。
- 昭和三七年 三月 論文「仏師快慶論」により、京都大学より文学博士の学位を授与される。
- 昭和四二年 二月 神戸大学文学部教授に転任する（四七年評議員、四八〜五〇年文学部長を務める）。
- 昭和五五年 四月 神戸大学文学部を停年退官する。
- 昭和五五年 四月 奈良大学文学部教授（文化財学科）となる。文化財学概論、美術工芸史概論・特殊講義・演習を担当する。
- 昭和五五年 四月 文化財学科主任を務める（五六年三月三十一日まで）。
- 昭和五五年 四月 近畿日本鉄道株式会社嘱託となる。
- 昭和六〇年 二月 近鉄企画の映画「仏教伝来と半跏思惟像」の調査・取材で韓国に赴く。

昭和六〇年一〇月 第六回韓国史学術会議に出席のためソウルに赴く。
 昭和六一年 六月 正常庄水頭症を患い入院加療する。
 昭和六一年 九月 硬膜下血腫のため再度入院加療する。
 昭和六一年一月 勲三等旭日中綬章を授与される。
 昭和六二年 三月 奈良大学文学部を停年退職する。
 昭和六二年 九月 一〇日、脳動脈硬化症が悪化し、不帰の人となる。享年七〇歳。従四位に叙される。

著作目録

著書・編書・監修

- | | | | |
|------------------------|----------|----|-----------------|
| 日本仏像史研究 | 昭和五五年 | 三月 | 法蔵館 |
| 兵庫県史 第五卷 | 昭和五五年 | 三月 | 兵庫県発行 (共著) |
| 大和の古寺 一 中宮寺・法輪寺・法起寺 | 昭和五七年 | 一月 | 岩波書店 |
| 日本彫刻史基礎資料集成 平安時代重要作品篇四 | 昭和五七年 | 二月 | 中央公論美術出版 |
| 春日大社の舞楽面 | 昭和五七年 | 七月 | 春日大社宝物殿 (監修) |
| 向日市史 上巻 | 昭和五八年 | 三月 | 向日市発行 (共著) |
| 仏教東漸 朝鮮と日本の古代彫刻 | 昭和五八年 | 三月 | 法蔵館 |
| 和歌山の文化財 第一卷 (高野山の編) | 昭和五八年 | 六月 | 清文堂 |
| 兵庫県大百科事典 第二卷 | 昭和五八年一〇月 | | 神戸新聞出版センター (共編) |
| 京都国立博物館蔵 仏教彫刻 | 昭和五九年 | 六月 | 便利堂 |
| 古代学への招待 II 半跏思惟像 | 昭和六一年 | 三月 | 大阪書籍 |

論文・その他

- 日本の彫刻について
博物館から大学へ
天平時代の美術
後白川天皇御木像の形状について
慶州南山三花鉢脇侍菩薩立像
奈良県金龍寺観音菩薩立像
喜光寺・西大寺・秋篠寺
仏師と能面師
魅せられた「大王岩」
韓国調査の旅―大王岩に再会―
神童寺・蟹満寺・禅定寺を巡る
天台彫刻
めぐりあい 丸尾彰三郎先生
道明寺と天満宮
三十三間堂の仏像
三十三間堂の彫刻―草創と再興―
宝菩提院菩薩半跏像のことも
運慶・快慶と高山寺・十輪院
高山寺神像・狛犬の作者について
- 昭和五五年 二月 『神戸大学国際交流センター』
昭和五五年 三月 『神戸大学学報』二八二
昭和五五年 四月 『週間朝日百科 世界の美術』一〇六 朝日新聞社
昭和五五年 四月 『書陵部紀要所収 陵墓関係論文集』 学生社
昭和五五年 六月 田村圓澄編『古代朝鮮仏教と日本仏教』 吉川弘文館
昭和五五年 六月 田村圓澄編『古代朝鮮仏教と日本仏教』 吉川弘文館
昭和五五年 六月 『近畿文化』三六七
昭和五五年 六月 『観世』四七一六
昭和五五年 七月 『奈良大広報』三〇
昭和五五年 七月 『正強学園報』一三 (右と同文)
昭和五五年 九月 『近畿文化』三七〇
昭和五五年 一月 『近畿文化』三七二
昭和五五年 一月 『毎日新聞』昭和五五年一月一日
昭和五六年 一月 『近畿文化』三三四
昭和五六年 三月 『近畿文化』三七六
昭和五六年 三月 『日本古寺美術全集』二五 集英社
昭和五六年 四月 『広報向日市』二五一
昭和五六年 五月 『明患上人と高山寺』 同朋社 (再録)
昭和五六年 五月 『明患上人と高山寺』 同朋社 (再録)
昭和五六年 五月 『明患上人と高山寺』 同朋社 (再録)

- 田万清臣先生と文化財 昭和五六年 五月 『続行雲流水』 青巧社
- 加茂より鳥ヶ原へ―高田寺・春光寺・観菩提寺― 昭和五六年 六月 『近畿文化』三七八
- 出雲の古仏 昭和五六年 八月 『近畿文化』三八一
- 飛鳥・白鳳の童形仏とその源流 昭和五六年一〇月 『新羅と日本古代文化』 吉川弘文館
- 宇治の古美術散歩 昭和五六年十一月 『近畿文化』三八四
- 満願寺仁王像とその周辺 昭和五六年一月 『川西史話』 川西市役所 (再録)
- 薬師寺の狛犬 昭和五七年 一月 『正強学園報』一八
- 新薬師寺の本尊と十二神将像 昭和五七年 三月 『近畿文化』三八八
- 若狭地域の彫刻 昭和五七年 三月 『若狭地方歴史資料調査報告書』 小浜市教育委員会
- 伎楽面小考 昭和五七年 三月 『古面』 京都国立博物館
- 朝鮮三国時代の弥勒浄土磨崖像 昭和五七年 三月 『文化財学報』第一集 奈良大学文学部文化財学科
- 神島・答志島の仏像 昭和五七年 五月 『近畿文化』三九〇
- 栄山寺とその付近 昭和五七年 六月 『近畿文化』三九一
- 新しい学問への情熱 昭和五七年 六月 『奈良大学』一九八三 (大学案内)
- 新羅の石窟寺院 昭和五七年 七月 『近畿文化』三九二
- 快慶 昭和五七年 七月 『日本美術史の巨匠たち』 筑摩書房
- 秦氏とその遺跡 昭和五七年 八月 『日本の渡来文化 座談会』 中央公論社
- 諸君の責任―とくに文化財学科の学生へ― 昭和五七年 九月 『奈良大広報』三八
- 粕坂磨崖仏と金體寺 昭和五七年十一月 『近畿文化』三九六
- 日韓古代美術雑考 昭和五八年 一月 『韓国文化』一九八三年二月号
- 倉田文作さんを悼む 昭和五八年 一月 『朝日新聞』昭和五七年一月二六日

快慶と重源	昭和五八年 二月	『重源・叡尊・忍性』 日本名僧論集 五 吉川弘文館
唐招提寺鑑真和上坐像について	昭和五八年 三月	『行基・鑑真』 日本名僧論集 一 吉川弘文館
獅子窟寺薬師像抄	昭和五八年 三月	『近畿文化』四〇〇
鑑真と唐招提寺の美術	昭和五八年 四月	『近畿文化』四〇一
南山城・木津の仏像と石造美術	昭和五八年 四月	『近畿文化』四〇一
大將軍八神社と大報恩寺	昭和五八年 七月	『近畿文化』四〇四
岐阜市と白鳥町の仏像	昭和五八年 八月	『近畿文化』四〇五
康俊・定慶・湛幸	昭和五八年一〇月	『兵庫県大百科事典』 神戸新聞出版センター
近江の平安造像銘	昭和五八年十一月	『近江地方史研究』一八
松阪・多気の仏像	昭和五八年十二月	『近畿文化』四〇九
六波羅密寺の彫刻について	昭和五九年 二月	『近畿文化』四一一
分類と表現様式	昭和五九年 二月	『法隆寺献納宝物 伎楽面』 東京国立博物館
東大寺法華堂の伝日光・月光菩薩像	昭和五九年 三月	『文化財学報』第三集 奈良大学文学部文化財学科
私と帰郷	昭和五九年 四月	『宇中卒業五十周年記念誌』 石崎忠八発行
兵庫の仏像	昭和五九年 四月	『ふるさとのみほとけ』 兵庫県立歴史博物館
田中嗣人著「日本古代仏師の研究」	昭和五九年 六月	『日本歴史』四三三
三重の平安銘記像	昭和五九年 六月	『近畿文化』四一五
奈良の仏師たち(上)	昭和五九年 七月	『近畿文化』四一六
伊予の仏像を訪ねて	昭和五九年 八月	『近畿文化』四一七
亀岡の古仏	昭和五九年 九月	『近畿文化』四一八
苦と楽	昭和五九年一〇月	『奈良大学』 大学入試シリーズ 教学社

七条道場金光寺と仏師たち	昭和五九年二月	『一遍上人と時宗』日本仏教宗史論集 一〇	吉川弘文館
奈良の仏師たち(下)	昭和五九年二月	『近畿文化』四二一	
禅定寺と法界寺	昭和六〇年 一月	『近畿文化』四二二	
半跏思惟像とその周辺	昭和六〇年 四月	『半跏思惟像の研究』	吉川弘文館
仏師善春と額安寺	昭和六〇年 四月	『近畿文化』四二五	
海住山寺	昭和六〇年 六月	『近畿文化』四二七	
平泉の彫刻メモ	昭和六〇年 八月	『近畿文化』四二九	
編集後記	昭和六〇年 九月	『仏教芸術』一六二	
韓国の弥勒浄土磨崖像	昭和六〇年一月	『第六回韓国史学術会議』	国史編纂委員会
日本の半跏思惟像	昭和六〇年一月	『近畿文化』四三二	
安住の御堂	昭和六〇年二月	『同期会報』昭和六〇年二月一日	
平安初期の向日地域仏像	昭和六一年 一月	『近畿文化』四三四	

この年譜・業績日録は、故毛利久先生が長年にわたり、綿密に記録しておられた手記を元にして作成したものである。昭和五四年以前の内容については、前任校である神戸大学を御退官の折り、『毛利久先生年譜・著作日録』としてすでに発行されているため、本書は年譜の一部を除いて奈良大学御着任以後のものを中心に収録した。また、手記には、昭和四三年五月二六日より六一年一月二六日までの間の、計二七三回にわたる講演記録と、御着任以前の他大学出講の詳細な記録（出講記録は右書に掲載済）が残されていたが、編集の都合上割愛させていただいた。こうした内容の不備等は、すべて編者の責任である。